

トンガ (Tonga) 王国国民の憂い (首相が中国に国を乗っ取られると発言)

(第2回) 関東支部 浦野勝雄

今回はトンガ諸島の本拠地である主島①**トンガタブ**、ヨット愛好家の羨望の島で観光の島でもある②**ババウ諸島**、美しい海岸がありナマコのとれる③**ハーパイ諸島**に関して、人々の生活状況の概要を書いてみます。

①トンガの主島 トンガ‘タブ (Tonga’ Tap) 島



トンガ‘タブ島地図 (Net 引用)



ヌクアロファ海岸で座礁した廃船

トンガタブ島はトンガ人口の約70% (75,000人) が生活しています。面積は260 km²で沖縄の西表島 (289 km²) より少し小さくトンガ王国の首都ヌクアロファ町がある島でトンガ王国最大の島です。北の濃い茶色の大きいところがヌクアロファで王宮や官庁、学校などがあり、島の真ん中へラグーンが入り込んでいます。ラグーンは海水の循環が悪く、かつ周りからの汚水の流入であまりきれいではありません。島の南側は農業地帯で海岸が崖になっているところが多くあります。人家は主に島の北側とラグーンの周りにあります。

ヌクアロファには2009年には数軒だったと思う中国レストランが、6年後には増えていました。中国人特有の町づくりで中国関係の店が町の中央に近いところに集まりだしました。私の運転手は「数年後ここはチャイナタウンになっているだろう」と話

していました。

街の北側のラグーンの上に伸びている半島に王家の所有の発電所があります。発電所はディーゼル発電で約 8MW の発電能力を持っていてニュージーランド人の技術指導で発電・送電・配電、事業をしています。発電所の社長は当時ニュージーランド人でした。

トンガタプ島はババウ島、ハーパイ島の離島生活とは違い、都市型生活で、住民はテレビ、新聞 に接し、外国の情報を得、外食で中華料理、イタリア料理、韓国料理店などを食することもできます。日本料理も最初ありましたが、なくなっていまいした。離島の人と違い自給自足の人のほかに、サラリーで生活する人も多く、我々と同じように、マーケットで食料や衣類を購入し、道路わきでヤム芋、果物、魚などを購入して生活しています。

トンガの平均家族数は平均 1 家族 6 名で、男子は小学校入学ころからヤム芋、タロイモ、キャッサバなどの栽培農作業を手伝い、女子はバンダナスやタコノ木の繊維（生の葉を処理して使用する）で作るマットや布の製造を手伝います。生産した農産物は自家使用し、余剰農作物は道路またはマーケットで販売します。昔のように芋類を主食に、食物の繊維を利用した衣類をまとう生活で満足できれば問題はないのですが、現在は外国から各種食料や製品が入り、近代的な生活をするととなると簡単ではありません。

現金収入を得るため働かなくてはなりません、十分な職業がありません。国は公務員（警察、消防、軍隊、教員など）を必要以上に多くしているが公務員として働ける人は幸運な人達です。そのほかの人は少ない産業や、サービス業で働くか余剰作物を販売して生計を立てます。また外国に出稼ぎに出た家族からの仕送りで生活しています。国は教育と健康に重点を置き、初等教育と医療は無料です、ただし十分な医療は期待できないようです。独自の大学はありませんが、フィジーにある南太平洋大学の分校があります。

トンガ人



電力会社の友人3人とも 150 kg 以上
1人 190 kg 私 62 kg



女子学生：
若いころはみなスマートです

人柄は「おおらか、温和、家族の絆を大切にする。キリスト教徒で信心があつく各教会派に属し、同じ会派の人は家族のように強い絆で結ばれ、お互いに尊敬、分け与えることを美德とする。年長者を敬い本音と建て前を使い分け世間体を気にし、競争を好まないのので地道な努力を嫌うところがあり、金持ちになったり、リーダーになろうとする気持も高くない」と言われています。

好奇心や、やる気のある人は海外へ比較的容易に移住できるようです。確かに彼らの生活を見ていると、我々とはテンポが合わないのは確かですし、マーケット内の販売の方法などに性格が表れているように感じました。

多分冬の寒さがないから、芋と魚、バナナがあれば生きていける平和な社会であったのです。独立前はこの生活で充分であったが、独立後は主食が芋からパンや麺類に、魚から肉へ、と多様化しました。その結果 食品、燃料、衣類、建設財、家電、日常生活用品等は輸入しなければならなくなりました。

トンガは世界一肥満国と言われ、平均体重が男女とも 95 kg以上だといえます。2009年 ヌクアロファの病院が最初の仕事場であったので、毎朝病院受付の前を通り現場に向かう途中診察を待っている男女患者の大きいのに驚きました。ほとんどの人が 150kg から 200 kg くらいあるように思えました。少なくとも我々の2～3倍はありそうです。多くの患者がどちらかの足を引きずって歩いていたり、足が悪くなる人、糖尿病にかかる人が多いのが理解できました。2015年再度訪問した時、相手方担当者7～8人全員が 150 kg以上で、一人は 190 kgと言っていました。彼らは中腰ができません、中腰になるときは尻で座ってしまいます。中腰で簡単にできる作業も時間がかかり、尻で座ってから実施し、立ち上がるのも大変なようでした。歩くのも大変なようで、歩くスピードは遅く、結果行動も遅くなります。

現在、国をあげて対策に乗り出しているようですが、効果が出るのはまだ先のように

す。本人たちも減量しなければと考えているようですが、食を減らすのは大変なようでした。多分小錦関がしたように胃袋を小さくしないと食事を減らすことは困難なのだと思います。

肥満の原因は主食が芋類であり、最近は揚げ物、コンビーフ、インスタントラーメンなどを食べるが多くなったからだといわれています。さらにトンガ人の性格、伝統的に隣近所と助け合って生活してきたので、物を食べる時そばにいる人に分け与えて一緒に食べる習慣があり、断ることができないで必要以上に食べてしまうからだと言っています。

自国民または外国人の分け隔てなく、物を食べる時は分けてくれたりします。ババウ諸島の島へ調査に出かけた時、ある家庭で前の海でとれた大きな珍しい貝をご馳走になりました。別の島では集会場で島の料理をご馳走になりました。

旅人にも親切に分けてくれます。ホテルの従業員でも自宅の庭のバナナをもってきてくれたり、日曜日にはすべて休みになるので、ドライバーがトンガ料理を差し入れてくれたりしました。うれしい贈り物でした。

トンガタブ島の刑務所

飛行場からヌクアロハへ向かう途中、ヤシの木の生えている下の農地で作業をしている人たちに対して、運転手がここは刑務所で彼らは囚人だと教えてくれました。驚いたことに刑務所に柵がない。なぜだと聞いたら、「逃げたい人は逃げればよい、ただし狭い島であるからすぐに捕まり、罪が重くなるから誰も逃げない、もちろん殺人などの重犯罪人は別」だそうです。小さい島で特殊性を生かした合理的な刑務所であるのに感心しました。

トンガの衣装

現在トンガの衣装は西洋的な衣装であるが、中国製衣服が多い。ただし儀式（結婚、葬儀、学校、など）で正装するときはタオバラという腰蓑をズボン、スカートの上からつけます。タオバラだけ身に着けた人は民族舞踊の踊り子以外は見ませんでした。OL はスカートの上からキエキエという飾り腰巻をつける人もいます。



キエキエをつけた女性：
多分タオバラの変形



登校：
タオパラを着けた私立中高生

トンガ食料・料理(Lu)

トンガ人の伝統的な食料はヤム芋、タロイモ、キャサバ、サツマイモ、パンの木の实、魚です。現在でもハーパイ諸島、ババウ諸島では従来型の自給自足的な生活をしている人が多くいます。首都のあるトンガタブ島では伝統的な食生活が基本ですが、西歐的な食生活様式も入っています。中国人の経営するレストラン、シンガポール人の経営する唐揚げ店、そのほか外国人などが経営する、比較的安価な食堂があり、現地の人たちも利用しています。

トンガでは平日と休日の食事内容を分けている家庭もあります。平日は伝統的食事をして、日曜日はキリスト教の安息日のために家族全員でタンパク質（肉、魚など）とパンなどの料理を家庭でとるのだといいます。

ヌクアロハにはトンガ料理の店が見当たらなかったのですが、トンガの伝統的な料理とパンの实が食べたいと言ったら、ホテルの事務員が自宅で作り差し入れてくれました。それが Lu といっていた料理です。香辛料で味付けした魚、肉、ココナッツミルクをタロイモの葉で包み、これをホイールで包み焼いた料理です。ポリネシアの国はバナナの葉で包んだ材料を焼いた石の中に入れて蒸し焼きする料理を TV で見たのを思い出しました。多分あの料理と同じものと思いながらいただきました。トンガタブでは昔のように焼いた石の中で蒸し焼きするような料理はプロパンガスの普及でなくなってしまったのでしょうか。



差し入れてくれた蒸かしヤマ芋
と Lu の包み



Lu 料理：
豚肉の芋の葉包み料理、周りが芋の葉

パンの木

トンガ農村部や離島の家庭は必ずと言ってよいほど庭にパンの木とマンゴーの木があります。マンゴーの木は大木になったりしています。木の下は良い日陰になり、格好の憩いの場であり、集会所にもなります。

パンの木は年に数回収穫できるフルーツですが、生では食べられません。蒸かす、煮る、焼く、炒めるなどして食べます。大きさはソフトボール大か、それよりも少し大きいものが多いです。道路端でも販売しています。味はパンのように私は感じました。



パンの木と実



パンの木の実（自分で料理したもの、
味はパンのようで、おいしいです）

パンの実は 100 g 当たりのカロリーは 103kcal です。100 g 当たり食パンのカロリーは約 260kcal, ご飯が約 170kcal ですので、食パンの約 40%、ご飯の 60%のカロリーがあります。

ヤマ芋のカロリーは 100 g あたり 110kcal です。パンの木の実もヤマ芋もほぼ同じカ

ロリーですので、お腹を満たすのに十分な食品であり、コメの代理になります。調べてみると、パンの木の実にはビタミン類が豊富に含まれ、カリウム、カルシウム、リン、マグネシウム、葉酸なども豊富に含まれている、立派な栄養食品です。

カバ飲料

トンガでは伝統的に部落の人たちが集まってカバという植物の根から抽出した液体を飲みながらパーティーまたは会合を開くと言います。この液体は一種の麻薬で飲むと本音が出ると言います。小生はアルコールに起因する持病があるため、好奇心で飲んでみたい気持ちがあったが旅先で持病の発生を恐れ、頂くことを断念しました。翌日カバの木とはどんなものか見たいと思い、運転手の知り合いの家にあるというので訪問しました。

写真にありますように木と言うより竹のように節のある茎の太い植物です。

カバは木の根を乾燥させて、粉にして水に混ぜるか、そのまま水でもみだしてろ過した泥水状の液体で、向精神物質を含み酒に酔った時のような気持ちになり催眠作用があると言います。



ドライバー友人宅のカバの木



カバの液体：
催眠幻覚作用があるらしい

②ババウ (Vava' U) 諸島

ヨット停泊の良湾が多くあり、たくさんの外国ヨットが停泊していました。ババウ島はトンガで最も優れた観光地で世界中のヨットマンが来島すると言います

ババウ島の概要

トンガ列島は環太平洋火山帯の中になり、東側はトンガ海溝が走っています。ババウ地方はトンガタブ島から北へ 270 km のところにあり、火山島ですので起伏に富んで

います。ババウグループは約 40 島ありますが住民は主にババウ島とその近海にある島に住んでいます。ババウ島には標高約 131m の山 (Mt. Talau) があります。

ババウ島のネイアフがグループ主町で、ホテル、飛行場、レストラン、中国人経営の商店などがある小さな町ですが、静かで海のきれいな穏やかな街です。前述したように全国人口の 15.2% (約 15,000 人) がババウグループに在住しその 70% 以上がネイアフに集中しています。

ババウ島グループは下に 6 地域があり、地域の下に村組織があります。明治時代の日本と同じようにグループ長 (知事) は国が選任し、任期 3 年の地域長、村長 (Town Officer) は住民が選挙で選出します。本島の下に散らばっている離島にある村を回り、村長や住民にお会いし、住民の島内での生活状況などをお聞きしました。同じような場所に位置する島ですから、生活内容も同じように思えますが、外洋に面した島、湾内だけの島、砂浜の美しい島、洞窟のある島、鯨の来る島などそれぞれ特徴があります。



島の生活

ババウ島の近辺は写真地図のように島が狭い範囲に密集しています。右上の逆 U 型の島がババウ本島です。

右側の半島の先に 3 本の小さな半島の付け根の赤丸印が主町ネイアフです。(黄色の矢印の場所)

アメリカ、オーストラリア間のヨット航路の重要な寄港地になっているようで、多くのヨットが湾内に停泊していました。驚いたことにヨットには学齢期の子供も乗っていて、港に入ると人によっては 1 週間から 1 か月または数か月滞在し、その間ヨット

に寝泊まりして、子供を地元の小学校へ入学させて学校生活を忘れさせないようにすると言っていました。地元の村長も短期入学を受け入れると言っていました。

丁度ある島にいた時、アメリカ人の若い夫婦と子供が上陸してきました。サンフランシスコからオーストラリアへ行く途中で、休憩と子供のために寄港したと言っていました、彼らに子供の学校はどうするのかと聞いたところ、上述のように学校へ入れたと言っていました。またオーストラリアへ着いてからどうするのかと聞きましたら、ヨットを売ってイギリスへ移住すると言っていました。この夫婦の場合移住前の記念航海であったようですが、このように人によって様々な理由でヨット航海しババウ島へ寄港しています。

ババウ本島はディーゼル発電機で発電し、配電していますが周りの島は無電化村です。数年前に EU から太陽電池システム (SHS) を贈呈されましたが、厳しい環境に耐えられずパネルは劣化、又メンテナンスもうまくできず設置後 3 年くらいで稼働しなくなったと言っていました。電気を利用できなくなった住民はもとの灯油ランプ、ローソクの生活に戻りました。

訪問した島はネイアフからスピードボートで 30 分から 1 時間の範囲で波もなく、快適な移動でした。オーストラリア人のスピードボートの運転手兼船長がクジラの通路やトビウオの出るところを知っていて、親切に教えてくれました。運よく帰りにクジラやトビウオの群れなどに出会ったこともありました。トンガはこの島をクジラと泳げる海とって宣伝しています。

ババウの離島は職もなく、学校もない島もあり、特に若い人はネイアフ (Neiafu)、またはヌクアロファへ移住するので人口は減少しているといえます。

ネイアフへ移住した人は週末に自分の島に帰りたいが、離島とネイアフ間の公共交通期間がなく、交通費が高いため頻繁には帰れないと言っていました。

Lape 島というのどかな小さい島があり、8 世帯くらいあったようですが我々が訪問した時は 2 世帯のみで、みな島を去ったといえます。このように離島の人口は減少する一方です。この島では甲羅の美しいカメが来るらしく、住宅の前に置いてありました。お土産にあげるから持っていけと言われてましたが、頂いても持って帰れないので、丁重にお断りしました。



Lape 島の栈橋（島への玄関口）島によっては栈橋がなく、ボートから浅瀬へ直接降りたりします。



Lape 島の住宅と住民、使用不可の劣化した SHS (Solar Home System) のパネル

島には学校もクリニックもない島が多く、店もなく当然警察官もいません。住民はわずかな土地を耕し芋芋、タロイモなどを作り、魚を取って生活しています。男性の仕事は農作業と魚とりで自家使用分以外の余剰品をネイアフにある市場へ持て行きます。

女性はバンダナスまたはタコの木の葉のゴザや布を製作します。これ以上の生活を望まなければ、危険な事件も起こらない平和でのどかな暮らしが送れる楽園です。しかしながら独立後インスタントラーメンやコンビーフ、電気製品、日常生活用品が入って、主食の芋だけでなくパン食や西洋型の生活するようになると、現金が必要になります。現金を得るために家族の誰かが海外（主にニュージーランド、アメリカ、オーストラリア）へ出稼ぎに行き、海外の家族からの送金に依存するようになったそうです。炊事用に、住民は枯れ枝やヤシ殻を燃料として使用しています。



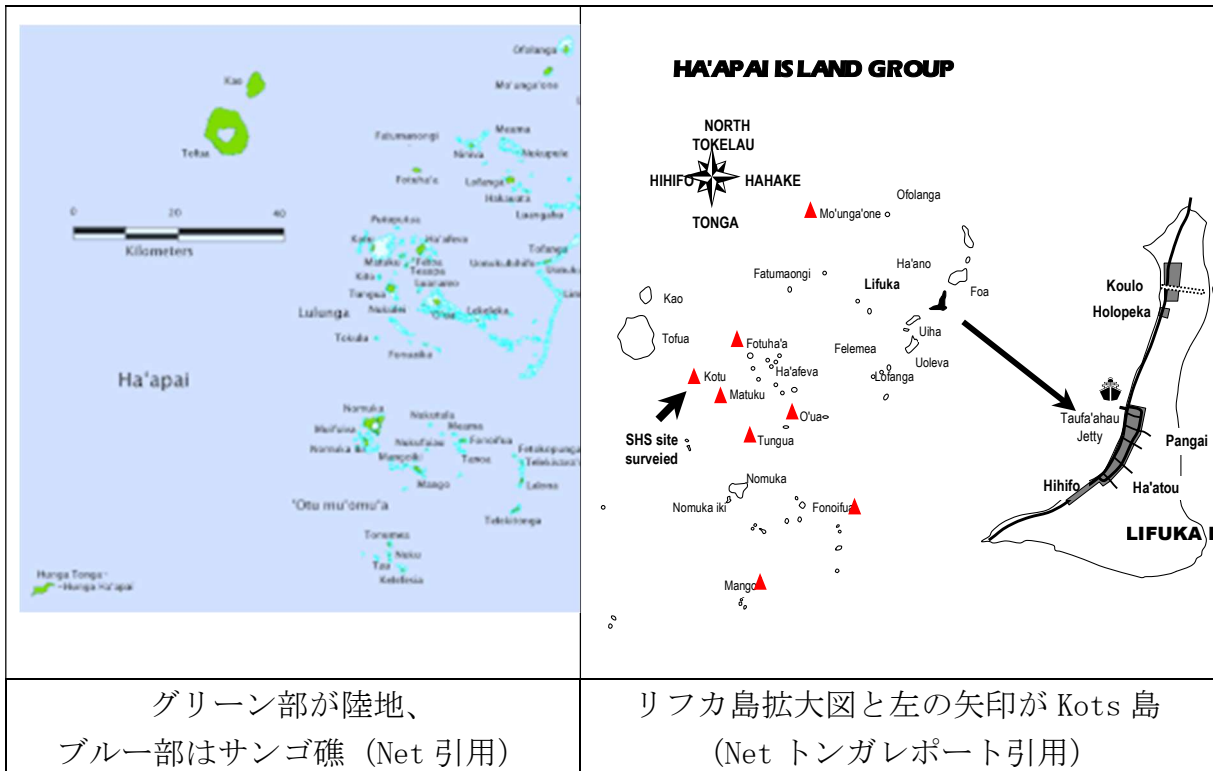
島の女性の共同作業：バンダナス
またはタコの木の葉でゴザ作成



炊事場

③ハーパイ (Ha' pai) 諸島

ハーパイ (Ha' pai) 諸島の中心リフカ島はトンガタプの北約 160 km にありトンガタプ島とババウ島の間にあります。リフカ島は細長い島で北にあるファオ島と橋で結ばれています。ハーパイ諸島はババウ島と違い、ヨットに適した場所はありません。美しい浜がありますが観光客も少なく、静かで、のどかな島で日本の閑散村に似ています。



空港はリフカ島の北部にあり、滑走路が島を縦断する 1 本の道路を横切るため、道路に遮断機があり、飛行機が来ると通行止めになります。滑走路は海から海までの短い滑走路です。小型飛行機のみ離着陸可能です。

有人島が 17 島あり人口は全体でトンガの 7.5%、約 7500 人で、内 54% がリフカ島とファオ島に住んでいます。ハーパイ諸島の主町はリフカ島のパンガイです。

リフカ島、ファオ島の面積はそれぞれ 11.4km²、13.4km²、合わせて 24.8km² です。東京の父島 23.45km² で人口 2160 人ですので、父島より少し大きいですが、ほぼ同じ大きさです。



ウオレバ島 (Net 引用)



カオ島、トファ島 (Net 引用)

リフカ島地方は北からハアアノ、ファオ、リフカ、ウオレバ、タタハ、ウイハの6島が連続しており、ファオ島とリフカ島が橋でつながっています。リフカ島とウオレバ島の間は西表島と同じように干潮時には馬・牛で渡れます。

西側には活火山の島2島（トファ島、カオ島）があり煙を上げています。トファ島の海拔（火山）は1086mあります。コツ島へ行く船から海上はるか遠くに富士山型の山が浮いているように見えます。

西のトファ島と東のリフカ島との間にコツ島があり、コツ島はハーパイの主町パンガイから西に約60kmの海上にあります。コツ島へスピードボートをハイヤーして出かけました。

コツ (Kots) 島へ

4~5人乗りの船外機を2台装着した小さなボートで外洋へ出るのは初めての経験で少し緊張しました。

ハーパイ本島との往復は大変でした。サンゴ礁の島ですので、サンゴ礁の中をボートで航行している間はあまり揺れませんが、一歩サンゴ礁外へ出ると外洋であり、うねりが高く小さなボートはまるで木の葉のように揺れます。日本からの同行者2名は完全に船酔いをして動くことができません。小生は船の動きに合わせて数時間体を動かし続けどうにか船酔いを免れましたが、木の葉のように揺れるボートで何時間も揺られるのは大変でした。

丁度我々がコツ島へ出かけた1か月前に、バンガイとトンガタブ間の連絡船アシカがリフカ島パンガイを出港したあと沈没し、70数名が亡くなった直後でしたので、あまり良い気分でなかったのを覚えています。アシカ船はJICAが最初フィジーに提供した船で、かなり古くなっていたようです。この事故の時も沈没船の捜索、救援はニュ

ージーランドの政府が主に実施したように覚えています。ニュージーランドから捜索・救援機が到着するまでに時間がかかり、迅速な救援は期待できなかったと思います。日本と違って、連絡方法もなく、救援体制はありませんので、すぐに救助船や、航空機が探しに来ることは考えられません。

ボートは船外機が2セット設置されていましたが、船長以下4~5人乗れるだけの小さいボートですから、一度海難事故になるとほぼ絶望的だと言われる島国の交通実情です。

日帰りで行く予定でしたが、心配していたように午後海が荒れて帰れなくなりました。ホテルも何もない絶海の孤島で、その晩は村長の家にお世話になりました。

コツ島の生活



われらを運んだスピードボート
とコツ島の船着場



船長とコツ島で

この経験は島民の生活を知る良い機会になりましたが、突然の珍客に村長家族も大変迷惑あったであろうと思います。突然の宿泊を快諾され、夕食の用意までしてくれました。この時出してくれたご馳走が写真の蒸かしたヤム芋、とれたての魚（名は分かりません）とインスタントラーメンとコンビーフを混ぜて炒めたそばでした。最上級のおもてなしを受けました。家族が食べる食料を突然の来客に分け与えるのは辛いことなのだろうと想像し、食べるのが悪いようで気が引けましたがご馳走になりました。飲み物は青いマンゴーを搾って作ったジュースでとてもおいしかったのを覚えています。島はハーパイ諸島の本島からも離れ、周りに島もなく孤島で、たとえ安価なインスタントラーメンでもヌクアロファからハーパイ島を経由してこの島に持ち込まれるまでは大変な時間と労力・コストがかかっています。夕食後、雑魚寝を決めていたのですが、我々のための真新しい寝具がどこからか運ばれてきました。トンガ人のおもてなしと心使いにうれしくなりました。

南太平洋の孤島で、まだ自給自足に近い生活を送っているコツ（Kots）島ではインスタントラーメン1袋も貴重な食料であることがよくわかります。

Kots 島は主島から遠く店も、クリニックもなく、警官もいない、完全に自給自足の島です。家の炊事場は屋外で、簡単な囲いがあり、炉はくぼみを作り、燃料はヤシ殻や枯れ木です。どこの島も燃料はほぼ同じものを使用しています。

電気はEUが寄贈した50Wの太陽電池（SHS）があるが、電灯とケロシンランプの共用です。コツ島のSHSはメンテナンス要員を置き、定期チェックしているのでこの時はうまく稼働していました。水は雨水を屋根から取水しタンクに貯水し、使用します。



夕食膳：蒸かしたヤム芋と新鮮な（とれたて）の魚



Kotu 島の村長宅：朝、娘さんがインスタントコーヒーを入れてくれました

ハーパイ島の産業

ハーパイ島の産業は主島ファオ島、リフカ島のサンゴ礁でとれるナマコです。トンガの人は食べないが、トンガ人が獲り、中国人が全量買い取り、リフカ島で建設した乾燥工場で乾燥して、中国へ送っています。ナマコ資源保存のため政府は年間で漁をできる期間を4月1日から9月30日までと決めています。

Matangi tonga (2011/6)ニュースによると、漁獲量もトンガ全体で年間100トンから300トンとばらつきがありますが、年々漁獲量が減少しているといわれています。

工場で働くのはみな中国人でトンガ人はいないと言っていました。外地の中国人の商店、レストラン、工場などでの労働者はみな中国人です。どこの国でもこの点が問題になっていました。

トンガ国は輸出する資源や製品がないにもかかわらず、国民の生活はそれほど悪くありません。一人当たりの GNI (Gross National Income) は USD4300 (米ドル) もあり、ほかの島国・開発途上国に比べると悪くありません。世界 213 ケ国中 109 番目です (2017 年 WB データ)。WB (世界銀行) の分類では中所得国です。

産業もなく、これと言った収入源もない国が高い GNI を得られるのは外国からの送金によるからです。海外の親族が稼いだ金で食べて行けるのですから誰もそんなにあくせくと働く気にはならないのでしょう。トンガは無競争社会なのです、昔からの生活様式を変更できず国民は少し安閑としているところがあるかもしれません。

そこへ競争社会の覇者である働き者で商売上手な中国人が入ってきて、長時間働きますから、とても勝負になりません。

次回はトンガの問題点と中国人の活動働きなど経験をもとに考えてみたいと思います。

(2021 年 1 月 15 日)